同窓会報告

会長　花城　安夫（八期生）

去る三月の卒業式には二百余名の卒業生が志も新たに社会へ巣立って行き、我々同窓会の新しい仲間に加わりました。私は万年赤字で苦しい同窓会運営の為に、今年度の有力な活動資金ともなるべき入会費一人五百円也を徴収せんと決意も新たに式の直後出口の方で感激もあらたな卒業生の出て来るのをいまかいまかと待ちうけた。装いも美しく満面笑みをたたえた見目うるわしい乙女等の前に、伸村君と共に声を大にして立ちはだかったのである。所が意外にも殆んどの人達が協力してくれ、猫の手も借りたい程の忙しさに感謝の気持一杯であった。

前日のリハーサルの席上、悲痛な思いで同窓会の趣旨と現状を訴えたことが多分功を奏したようである。これで今年一年の資金はどうやら出来た。しかしこれまで何を計画しても、こちらが思う程、人が集まらない会活動を考えるとあまり手ばなしで喜んでもいられない。でも十一月には去年はじめての試みで運絡不足であったにも拘らずかなり評判の良かった家族ピクニックを予定している。

現在今年の卒業生を含め九百名近くにふくれ上がった会活動には、役員会としても相当苦労する。その中でも手軽に計画できる家族ピクニックは卒業期や年令に関係なく参加出来るプログラムであると思う。特に結婚して子供が二、三人も出来一人で参加するのが家族に悪いと思われる方には子供連れや家族ぐるみで参加し、同窓会を兼ねて普段出来ない家庭サービスにでもなればと思う。私もそうだがこゝまでに卒業生同志のカップルが十組以上もあると聞いた。彼等全員がなんとか集まることが出来れば盛り上がりのあるより楽しい会になるのではないだろうか。短大の事に併せて同窓会の事も憶え気軽な参加をこう。

図書館だより

「Book of the Year（課題図書）」を奨める

本短大図書館では、「Book of the year」制度を今年度から設けることにした。

これまでの学生諸君の読書傾向を、常出図書を通して調べてみると次のことが判った。々読み易い本々又は々余り思考力を伴わないような本々に飛びつく傾向があるということ。それ故、図書館では「欠乏は人間を苦しめるが、豊潤は人間を迷わせる。ただむやみに読めばよいという時代は去った。◎◎◎◎◎◎　◎◎◎◎◎◎何を読むべきか、量よりも選択があなたの進歩を予表する」（「現代のエスプリ」より）という視点に立ち、学生時代に是非読んでもらいたい、もしくは読むべきだという図書を、本短大の教師に推薦してもらった。この推薦図書を今年度の「Book of the year（課題図書）」として図書館の展示書棚に陳列し、貸出をしている。

これを機会に、この課題図書を学生諸君の読書活動の一助として大いに利用してくれることを切望する。

なお、後期に読後感想として、全学集会では読書座談会もしくは読書パネルディスカッション等を予定している。

※（「Book of the year」を課題図書という言葉で置きかえているが、それが適切であるかどうか疑わしい。もっと適切な言葉があれば、御教示を願いたい。

新着図書案内

新見宏・関根正夫著「知恵と黙示」講談社
T・K生「世界」編集部
「韓国からの通信」岩波
W・P・リブラ著　崎原貢訳「沖縄の宗教と社会講造」
伊波普猷著「伊波普猷全集」平凡社
日本子どもを守る会編「子ども白書」草土文化社
篠原陸治著「キプツの子供たち」誠信書房
F・M・ヘッチンジャー編「幼児の知育」黎明書房
渡部昇一著「言語と民族の起源について」福原麟太郎著
「シェイクスピア」研究社

事務局だより

スポーツコート完成近し!!

かねてより計画していたスポーツコート工事（工事費七百三十万円）は夏季休業期間を利用して着工した。九月一日に完成の予定であったが工事の最中に固い岩盤がでたため、工事が遅れ、完成は十日頃になる予定。スポーツコートは長さ三七m、幅二三mでバスケットボール、テニス、バレーボール等の球技ができるようになっている。またスポーツコートの工事用地より出た岩、土を学生センター近くの窪地にうめ、石垣を作り、将来の体育館建設の為の土地造成工事を行っている。

一九七四年度人事報告

一、採　用

A　事務職員

賀数弘子　庶務係（一九七四年九月二四日付）

二、長期研修

英語科　前里光盛助教授

国際基督教大学大学院語学科

一九七四年九月一五日～一九七五年九月一四日まで

三、就　任

学生部長　比嘉盛二郎助教授（一九七四年九月一五日）

四、療　養

島袋美代子　庶務係

結核性疾患の為現在療養中

教職員組合結成される

六月十日、沖縄キリスト教学院教職員組合が結成された。沖縄の高等教育にたずさわる者としての自覚に立って、組合員の経済的、社会的、文化的地位の向上を図ることを目的としている。

組合員数は十八名。委員長には保育科講師喜友名静子氏が選出された。組合役員は次の通り。我謝和子（副委員長）、比嘉健次郎（書記長）、遠藤久江・西銘純子（執行委員）、渡久地政順（会計長）、翁長美枝子・金武美代子（会計監査員）。

結成以来、給与、夏期期末手当の改善、夏期休暇等について学校側と交渉、一応の成果をあげている。

編集後記

この一年間の「学報」の編集には遠藤・比嘉（健）・漢那の三名があたることになった。これまでの成果を踏まえて、われわれは編集方針をO・C・J・Cとは何か―その identity を求めて―にスポットをあてていこうと思っている。はたして、どれほどその方針を貫くことができるか、先ずはお楽しみを乞うといったところであるが、内心寒々としているのが実情である。ところでこの八号の出来ばえはいかが?。今後とも皆さんの御協力を乞う。

（K・K）

（第８号）　1974年10月20日

沖縄キリスト教短期大学報

那覇市首里当蔵町３－６－１
沖縄キリスト教短期大学
電話 32－5161
発行人　平良　修
編集人　学報編集委員会
印刷所　協栄印刷株式会社
電話 33－4853

今日の教育とは

新見宏

このところ「韓国」の状勢と、日韓関係をめぐる諸問題が人びとの注目をひいている。わたしもかねてから個人的に韓国の問題にかかわって来たが、いままた特に緊迫した情況の中で多くの友人たちが直接間接に民主化のためのたたかいに死をとして参加していることを思うと、黙って坐っているのが苦痛であるとさえ感ずる。

「一人の教授が、私にこう語った。『学生がどうしても抵抗しなければならないと私に相談してきたとしましょう。私は、そのことを思いとどまらせるように説得しなければならないだけでなく、彼を当局に密告しなければならないのです。でなければ私は死刑です。その学生がCIAのエージェントかもしれないからです。もう私たちは教育者ではありえないのです。』」（『韓国からの通信』岩波新書二〇〇ページ）

いささかでも「教育」の業にたずさわる者としては、この悲痛なことばをききながすことはできないであろう。わたしはこのことばをはじめてよんだとき、さきごろ軍法会議で懲役十年の刑を宣告された友人のK教授の温和な顔を想いうかべて涙がにじみ出るのを禁じえなかった。十数年前ニューヨークの神学校で机をならべて学び同じ寮に生活して毎日食卓を共にしたK君は延世大学神学部長の要職にあったが、ある日突然同僚や学生の前から姿を消し、数日後になってやっと逮捕されていることがわかったのだとき く。K君とは同じ旧約学の学問上の事柄ばかりでなく、日韓問題をはじめ実に多くのことを語り合い、時には夜の明けるのも忘れて議論し合った仲である。その後数■韓国を訪れて彼の教える大学で会ったこともあるが、この二年間どのような思いを秘めて生きていたのであろうか、と胸ふさがれる感をもってニュースをきいた。

非常戒厳令下、大学に軍隊が常駐し、クラスに欠席しただけで最高死刑をふくむ極刑に処せられるという事態は余りにも異常である故に、かえって情況の正確な把握を困難にしているのではないかとさえ思われる。このようなグロテスクなむき出しの権力による弾圧に対して、「非常事態だから多少の言論統制もやむをえないのではないか。」「政府転覆を企てた共産主義者と、それに同調する一部の過激な学生やキリスト者たちは投獄されても仕方がない。」などという日本人がいる。しかも日本のキリスト者と称する人びとの中に！　反政府の共産主義者は拷問をうけても死刑になっても当然だというのだろうか。まして、いま審かれている学生たちや、教授・詩人などの法廷での堂々たる陳述（断片的にしか伝えられていないが）をよむと、これらの人びとがキリスト者としての信仰に根ざして真実を求め、同胞への愛に押し出されて発言し行動している崇高な姿を見出すことができる筈であるのに。正に、審かれているのは非道な独裁権力者と、それに追随する卑小な一群であることが明らかになりつつある。

「私のもとにいる学生たちが狭き門に向かい、苦しい道を行くといっていて立つのに、私だけが後に残ってはならないと思い、私は遅れたと感じつつも参与することに心を決めたのであります。……

私は、可能ならば学生たち以上に重くはなくとも、決して軽くはない重い罪を背負わしてくれるよう望むものであります。」（『世界』十月号一一五ページ）

私の年来の親しい友人朴炯圭牧師は法廷で右のようにのべている。いうまでもなく、現在見られるような恐怖政治をあえて行なう政権は早晩崩壊するにちがいないし、いまの現象が末期の徴候だということは確実であるが、こうした弾圧の中であくまで真実を問う批判精神を守ろうとする激烈なたたかいをたたかっているこれらの友人たちこそ次の世代の希望であり、そうしたたたかいの中に真の教育のわざがある。

ひるがえってわたしたちの足下をみてみよう。一見したところ■本には権力による思想弾圧もなく、言論も、集会・結社も自由である。ファシズムの危険などというと戦中（前）派のとりこし苦労か被害妄想だとしりぞけられるかもしれない。しかし、むき出しの権力よりも恐ろしいのは眼に見えない、なしくずしの統制である。圧迫を感じさせないやり方で情報を規制し、思想・言論を操作するのが最も現代的な支配の手段であろう。

韓国の友人は「もはや私たちは教育者ではありえない。」と叫んでいる。では私たちは教育者でありえているのか。そもそも大学における教育とは何なのか。わたしたちの短期大学は、いま何をめざし、何処に向って歩んでいるのか。このような問いを自らに問うてゆかなければならないであろう。

外部からの、一見明■な圧力がかかっていないときに、こうしたきびしい問いを自己の内側から問いつづけることは容易ではないが、このようなことこそキリスト教短大を批判的精神による探求の場とするいとなみである。もしわたしたちがふやけた「大学ゴッコ」をするのでないとすれば。

（英語科教授）

キリスト教短期大学はどう進むべきか
―第二回 サマー・ワークショップ―

保育科 遠藤久江

はじめに

今年のワークショップは〃沖縄キリスト教短期大学はどう進むべきか〃のテーマでおこなわれた。二年前沖縄の本土復帰に際し、沖縄キリスト教短期大学は、短期大学として新たにその設立の意味を自らに問うて歩み出したことは記憶に新しいことである。

しかし急激な社会情勢の変化は私立大学に様々な困難をもたらしている。大学はその数も増加し、経営上の困難から学生の数をふやし、その結果大衆化されてきた。また、社会的、経済的変動は中教審ともみられるごとく、大学教育の質的変化をせまっている。この種の挑戦は当短大にとっても例外ではなく、今日、見通しのある大学の組織、運営に最大の智慧と努力が求められている。

今年のワークショップは大学とは何かを問うことによって、今後の進むべき方向を摸索しようと試みた。この話し合いは、結論を出すことではなく、参加者（教授会メンバー）がそれぞれの経験と意見をのべながら問題点を明らかにし、討論を積み重ねてお互に学び合い、次の歩み出しを考えることに意味を見出そうとするものである。

短期大学とは何か

まず比嘉健次郎氏からは教育の面から、松田定雄氏からは制度の面から次のような発題がなされた。

▽教育の面から△ 近代の大学の理念は、研究の府として、今だ解決されていないことの研究の場と考えられていた。しかし、戦後この理念は崩壊した。その理由として、(1)大学の大衆化 (2)知識体系の量的拡大 (3)社会の期待の変化等があげられる。大学は今日まで研究と教育の一体化を志向してきたが、除々に教育的側面が重視されてきている。

我国の短期大学はその八六%を私立に負っており、その特徴は(1)教養人と職業人の育成を目的とし (2)地方に分散して (3)小規模である。当短大もこの特徴をそなえた標準的な短大であるといえる。

キリスト教短期大学は「キリスト教の精神に従って高等学校教育の基礎の上に一般学術を修得し、二年の大学教育を施し、更にキリスト教の専門的知識を究め、個人の人格完成並びに社会に有用なる人物を養成する」（学則第一条）となっている。発題者はこの中でキリスト教精神に従っての学術修得とは何か、社会の有用な人物とは何か、研究の位置付けがないこと等を鋭く指摘した。

次にキリスト教短期大学は何を学生に求めているのか、即ち「教養人か職業人か」、あるいは「教養人かつ職業人か」。職業技術教育と教養教育の二分的接近か統一的接近かを考えて、カリキュラムを中心に教育過程全体を検討して、みなければならない。

最後に教師の問題であるが、我々に教師として、研究者として、また学校の組織、運営に対して責任をもっているが、どの部分が強調されるのかが問われている。また当短大の特徴の一つに牧師も教師の役割をになっているが、牧師は教師なのかが問われた。

▽制度の面から▽ キリスト教学院は学校法人として社会に市民権をえて、キリスト教短期大学を運営している。しかし設立の歴史にみるごとく、沖縄のキリスト教教会との関係は深い。この状況をふまえた責任体制の明確化について発題された。

現在学院の組織は理事会、学長、教授会と責任体制がたてに流れている。ここでは学長は単に教授会の責任者としか位置づけられていない。学長は同時に、理事会と対等な少なくとも組織的には理事会に対して重要な位置をしめる責任者ではなかろうか。また理事長の責任範囲は理事会の中においてのみ理事長であることが指摘された。以上の発題のもとに二日間の討論をふりかえってみたい。

専門技術教育は可能か

〃沖縄キリスト教短期大学はどう進むべきか〃の問いに対しては、そこで展開している教育的営みと、その組織、運営の総体を大学の理念と、我国の短期大学がおかれている状況にてらして点検し、評価していく作業を自らがおこなわなければ方向は出てこない。その作業をこの討論をとおしてなしえたであろうか。

新任者の私は語られる諸問題を過去と未来の連続性の中で説明されなければ十分に理解しえない。しかし、討論にはどちらかというと、現状をどう受け止めて将来へ展開していくかに集中していたように思える。それ故発題者が提起した問題に対しても、自己を点検する作業が十分なされたとは思われない。このことは、今後どう進むかを考える場合、単発的な提案にとどまる危険性をはらんでいる。しかし、参加者が討論の中から学んだことも大きかったと思う。私もその一人であるので、ここにその所感をのべてみたい。

今日短期大学入学者の動機は、短大さえ卒業すればよいとか、免許をとりたいとか、一見明らかであるが我々は大学の使命としてそこに止まるのでなく、その動機を超えた教育過程をどのようにして準備することができるかを考えなければならない。

短期大学は職業教育の場であるか大学教育の場であるかが問われるが、当短大に後者の立場をとって進むことがまず確認され、短期の大学としての教育とは何かが話題になった。

古くて新しい問題に一般教育科目と専門教育科目の関連がある。短大では一般的に一般教育科目の独立性が弱く、専門科目に従属しているといわれるが当短大においてもこの傾向はまぬかれえない。また専門教育科目について、我々は短大のそれが、その種の専門教育過程のどのレベルに位置しているのかを十分検討していない。

両者の関連を単なる科目操作で解決するのではなく、各科からみた一般教養のあり方を検討し、今後は一般教育科目を強化していく方向が打ち出されたことに、大きな意味があろう。

専門技術教育については専門職業成立の過程において、相互に規定しあうものであって、専門教育のあり方が先行することはありえない。保育科の場合、その専門領域の拡大と質的向上により、〃保育者の養成は四年生大学において行うものとする〃との勧告がなされている。これらの動きをふまえて今後の専門教育について検討されると更に前進的であっただろう。

次に短大の進むべき方向の一つに、地域社会における高等教育機関としての自覚に立って、その役割を提案できなかっただろうか。短大の特徴の一つである地域性を生かして、今日の沖縄の社会に貢献しうる方法はないであろうか。この点に少しふれられたが討論が拡がらなかったのは残念であった。開かれた大学として、成人教育、あるいは再教育機関として大学の機能を考えてみることも今後の課題であろう。

紙面の都合で制度面からの討議について所感をのべることができなかったが、全体をとおしていえることは、短期大学の普遍的な課題と、キリスト教短大として解決しなければならない課題が混然として存在していることを自覚的にとらえようと努力がなされたと思う。我々は、キリスト教々育の場にあって、信仰と理性のパラドクシカルなむすびつきの中から現代を生きていこうとしていることを確認しあったと思う。

（第8号） 沖縄キリスト教短期大学報 1974年10月20日

On Campas

第七回OCJCキャンプは、八月三十日から九月一日まで、今帰仁の北山荘でおこなわれた。折からの台風とかさなって強行されたため、参加者は例年になく少数であった。

誰のためのキャンプか

保育科一年 大城孝子

キャンプのことは、入学式の時学生部の前里先生から、「キリ短からキャンプをとったら何も残らない、といわれる程、学生達に親しまれている」と紹介があったので、ずっと楽しみにしていたが、盆と正月ならぬ、盆と台風のダブルパンチで、わずかの参加者だけであった。また夏休みの最後の三日間だったので、二ケ月間の疲れが出たのか、みんなおとなしく、テーマの「男と女」についてのディスカッションでは、先生方のほうがハッスルなさっていたみたいだ。またわがキリ短は女が多いからか、ディスカッションでも女への風当りが大きく、「男は女より強い」のかどうか、あらためて考えてしまう。

私は、福岡女学院短大の夏季修養セミナーに参加したけれど、あちらではテーマの決定から会の進行までの綿密な計画を、学生の宗教委員が行なっていた。そのセミナーの反省会の時、「準備は集会のプロセスに入っている。準備がしっかりできていたら会は半分成功だ」とある先生が評価なさっていたように、まとまった集会だった。私はO・C・J・Cキャンプに参加する時に、キャンプの実行委員を募っていると聞いても知らん振りをして、参加すればいいという考えだった。ほんとうは、キャンプをつくるのは、参加する「わたし」であったはずなのに。たとえば、雨のためキャンプファイヤーをとりやめ、屋内でしたレクリエーションも、とっても楽しかったけれど、ひとりの先輩にまかせっきりにしてしまった。来年のキャンプにもし参加できるなら、私も小さな力だけど出してみたい。

OCJCキャンプに参加して

福岡女学院家政科二年 志賀敦子

福岡女学院短大での夏期修養セミナーを終えて沖縄に向って船出した時は台風の影響で海は大荒れで無事に沖縄に着くかどうかわからないといった状態でした。木の葉のように揺れる船の中でもしかしたらキャンプに参加できなくなるかもしれないと思いながらも運を天にまかせる気持でした。やっとの思いで着いた沖縄でしたがどうしても不安な気持を消すことはできませんでした。しかし暖かく迎えて下さった先生方にお会いしたとたんにホッとしてその不安がいっぺんに吹き飛んでしまいました。その夜は遅くまで「沖縄らしい所に連れて行ってあげよう」という先生のお言葉でコザの方まで案内していただきました。

目に写るものすべてがめずらしかったのですが、どこまでも続く米軍基地を見た時には想像以上の大きさに正直のところショックでした。

翌日から始まったキャンプは私達にとって大変興味深いものであったし、また数えきれないほどのものを得ることができました。まず最初に驚かされたのは学生の皆さんの明るさでした。そして先生と学生との人間味あふれる交わりの場を見た時には本当に羨ましいと思いました。キャンプ全体には自由な何とも言えない明るい雰囲気が流れており、卒業生も気軽に遊びに来ることができるというのは本当にすばらしいし、大事にしていただきたいという気持でした。それと同時に私達の学生の間で欠けていた大事なものを見い出したような気がし、学生が無関心だから仕方ないと簡単に終らせてはいけない問題だと強く思ったのです。

テーマについては、私達がセミナーで『女性の生き方』ということで話し合った後だけに通じるところが多く自分なりの考えを深めることができたと思っています。私が今後自分の生き方について考える時に様々な形での問いかけが生まれてくることでしょう。短期間の間に多くのことがあって言い尽せませんが、最後にお世話になった先生方、学生の皆さん本当にありがとうございました。」

OCJCキャンプ参加記

英語科一年 高置真一

「やはり男子学生が居るといいですね」と福岡女学院の学生は言った。このひと言だけでもキャンプに参加した甲斐があったと、僕は思っている。

たしかに楽しいキャンプだった。食事は最高に美味かったし、ディスカッションやゲームも楽しく、福岡女学院の学生たちとの交わりも意義があった。そして、楽しいと感じたんだから今後も続けるべきだという意見も、もっともだと思う。

しかしながら、何か物足りない。もっと若者らしく、日頃疑問に思い、模索途上にある未定形なものを、微笑みながら直截にぶつける場であってもよかったし、そうあるべきではないのだろうか。

そのためには先生方に、学生が投じる問いを全身で受けとめる寛容さと誠実さが要求されるだろう。また、学校の方としても、学生が自由に使用できるキャンプ場をつくるべきだし、キャンプ実施のための十分な経済的援助を与えるべきだ。

そういう方向に進まないのならば、僕は敢えて言おう、今のままのキャンプであるならば、あっても無きに等しいと。

第二回ヴィジョン杯 スピーチ・コンテスト

英語科では、第二回ヴィジョン杯英語スピーチ・コンテストを来年一月十一日（土）、午後二時本学において開催する予定である。

昨年行なわれた第一回コンテストには、英語科、保育科から八名の学生が参加したが "Three Main Traits" という題で話した英語科一年の内間るみ子さんが優勝して、ヴィジョン杯と副賞一万円を獲得した。

今年度のスピーチのテーマは近く発表される予定であるが、英語科、保育科をとわず、できるだけ多数の学生が参加するよう英語科では呼びかけている。希望者は、ウィリアム・ロイ先生または外間惠子先生に申し込むこと。

（英語科 金城美代子）

新学期になって、三名の教師陣の増員は保育科充実の源となった。前期は夏休みの実習が大きな課題であったが、一年生の幼稚園、二年生の児童福祉施設実習、保育所実習が七月一ケ月間にわたって行なわれた。また同じ七月に交通訓練、水泳訓練がおこなわれた。水泳訓練ではみんなが一日で泳げる様になった。

（保育科 久野真智子）